

〈新 刊 紹 介〉

江田すみれ・堀恵子編『自動詞と他動詞の教え方を考える』

本書は、2017年10月に日本女子大学で開催された公開シンポジウムの発表をまとめた論文集である。第二言語習得、日本語学、対照研究、コーパス研究などの各分野の研究者がそれぞれの視点から自動詞と他動詞について考察・報告したものと、授業実践に関するものからなる。2017年に出版された『習ったはずなのに使えない文法』（くろしお出版）に続くものである。

構成は次のとおり。「はじめに」「日本語の対のある自動詞、他動詞の習得段階とそれに適した指導方法（中石ゆうこ）」「日本語母語話者は本当に自動詞を好むのか？（中俣尚己）」「学習者作文と自他の使用頻度（李在鎬）」「辞書における自動詞・他動詞とコーパスにおける実態（山崎誠）」「コロケーションに注目した日中同形動詞の対照研究——「拡大する」・「広げる」と「中国語の拡大」／「増加する」・「増える」と「中国語の増加」を例に——（建石始）」「中国語を第一言語とする学習者に対する二字漢語自動詞・他動詞の実践授業——経済学部の学部1年生対象の授業において——（堀恵子）」「無対他動詞の受身と自動詞——いくつかの動詞の語義と受身の関係——（江田すみれ）」「中級学習者に対する自他動詞の授業とその効果——授業、事前・事後テスト、遅延テストを通じて——（江田すみれ・相澤早帆・白鳥藍）。末尾に「執筆者紹介」を付す。（阿久澤弘陽）

（2020年6月30日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 204頁 2,800円＋税 ISBN 978-4-87424-838-6）

飛田良文・佐藤武義編集代表、陳力衛編、村山昌俊・石井久美子・近藤明日子・小椋秀樹・齋藤文俊・北澤尚・服部隆・田貝和子・増井典夫・手島邦夫・鄭英淑・木村一・木村義之・真田治子・湯浅茂雄著『シリーズ〈日本語の語彙〉5 近代の語彙①——四民平等の時代——』

本書は、現在の研究の最前線を踏まえ、新しい視点・成果を提示するために企画・編集された『シリーズ〈日本語の語彙〉』の一冊として刊行されたものである。身分階層の時代から万民平等の時代へと移り変わり、ことばも「普通（アマネクツウス）」をキーワードに旧から新へと移行していった時期である近代の語彙について、普通文、言文一致体、訳語、近代辞書といった観点から考究した論が収められている。

構成は次のとおり。「序 近代の語彙（1）への誘い（陳力衛）」「第1部 普通文の形成」（「第一章 『太政官日誌』の語彙（村山昌俊）」「第二章 大新聞と小新聞の語彙（石井久美子）」「第三章 『明六雑誌』『東洋学芸雑誌』の語彙（近藤明日子）」「第四章 『女学雑誌』の誕生とその語彙（小椋秀樹）」）」「第2部 言文一致体の成立」（「第五章 翻訳小説の語彙（齋藤文俊）」「第六章 二葉亭四迷『浮雲』の語彙（北澤尚）」「第七章 山田美妙『武蔵野』『蝴蝶』の語彙（服

部隆)」「第八章 嵯峨の屋おむろの語彙(田貝和子)」「第九章 尾崎紅葉『二人女房』『多情多恨』の語彙(増井典夫)」「第3部 訳語の創出」(「第一〇章 西周の語彙(手島邦夫)」「第十一章 津田真道の語彙(鄭英淑)」「第一二章 中村正直の語彙(木村一)」「第一三章 福沢諭吉の語彙(木村義之)」「第4部 近代辞書と語彙」(「第一四章 専門語彙集の語彙(真田治子)」「第一五章 『言海』と『日本大辞書』の語彙(湯浅茂雄)」。巻末に「執筆者紹介」「索引」を付す。(田中佑)

(2020年7月1日発行 朝倉書店刊 A5判縦組み 224頁 3,700円+税 ISBN 978-4-254-51665-4)

庵功雄編著、志賀玲子・志村ゆかり・宮部真由美・岡典栄著『やさしい日本語』表現事典』

本書は、場面にそくした実践例を通して、外国人とのコミュニケーションの手段としての「やさしい日本語」を紹介・解説するものである。「やさしい日本語」の概要・背景・そのさまざまな側面について述べるⅠ部、外国人に対する情報提供のための具体的な方策を示すⅡ部、異文化を持つ人たちとの相互理解において重要な点を述べるⅢ部の三部からなる。

構成は次のとおり。「Ⅰ部 「やさしい日本語」の基礎」(「1章 「やさしい日本語」の歴史」「2章 外国人に対する情報提供と〈やさしい日本語〉」「3章 居場所作りのための〈やさしい日本語〉」「4章 バイパスとしての〈やさしい日本語〉」「5章 障害を持つ人のための〈やさしい日本語〉」「6章 日本語母語話者にとっての〈やさしい日本語〉」「7章 多文化共生社会と〈やさしい日本語〉)」「Ⅱ部 「やさしい日本語」の実践」(「会話編」「文章編)」「Ⅲ部 文化の差異」。末尾に、「付録 日本語教育分野を志す人のために」「参考文献」「索引」を付す。(阿久澤弘陽)

(2020年7月10日発行 丸善出版刊 四六判横組み 320頁 3,800円+税 ISBN 978-4-621-30512-6)

丸山徹著『キリシタン世紀の言語学——大航海時代の語学書——』

著者が30年以上にわたって公表してきた論文のうち、日本語で書かれたものをまとめた論文集。フランシスコ・ザビエルに継ぐ形で来朝し、日本語文法書二篇を残したジョアン・ロドリゲス、同時代にインド・ゴアの現地語であるコンカニ語の文法書を著したトーマス・ステューブンスなどを取り上げ、大航海時代のキリシタン語学書にポルトガル語側から光を当てている。

「はじめに」に続き、「1 キリシタン文献概観」に「1 「大航海時代」の語学書から学ぶもの」「2 ザビエルとロドリゲス——16・17世紀イエズス会の言語研究——」「3 「古典」としてのキリシタン文献——その語学書について——」「4 「大航海時代の語学書」としてのキリシタン文献」を、「2 ロドリゲス文典」に「1 中世日本語のサ行子音——ロドリゲスの記述をめぐって——」「2 Interpreting the interpreter (James Patrick Barron との共著)」「3

ロドリゲス日本文典におけるポルトガル語正書法——/aw/の表記について——」「4 通事伴天連ジョアン・ロドリゲスのポルトガル語正書法——/ej/の表記について——」「5 通事伴天連ジョアン・ロドリゲスのポルトガル語正書法規範——語表記の「ゆれ」からの考察——」「6 ロドリゲス文典成立の背景」を、「3 キリシタン文献ローマ字表記成立の背景」に「1 キリシタン資料「開合表記」成立の背景」「2 キリシタン資料におけるf表記をめぐる」「3 「ポルトガル語正書法小史」補説」「4 キリシタン文献ローマ字表記IJVUについて」を、「4 コンカニ語・コンゴ語文獻」に「1 Thomas Stephensとコンカニ語——研究序説とその展望——」「2 コンカニ・ポルトガル語辞書二写本の関連についての一考察」「3 コンカニ語ドチリナ・キリシタン成立の背景」「4 コンゴ語版キリシタン要理(1624)第一章——コンカニ語版・日本語版と対照させて——」を、「5 言語から見た近代ヨーロッパの側面」に「1 非人称構文に関する一考察——「記号体系としての言語」の外から眺めてみると——」「2 非人称構文に関する一考察(補説)——デカルトのEGO——」を収録。本文内にコラム10編、巻末に「初出一覧・欧文論文・翻刻・諸索引リスト」「索引」「あとがき」を付す。(田中佑)

(2020年7月15日発行 八木書店刊 A5判横組み 376頁 12,000円＋税 ISBN 978-4-8406-2244-8)

加賀信広・西岡宣明・野村益寛・岡崎正男・岡田禎之・田中智之監修、小川芳樹・石崎保明・青木博史著『文法化・語彙化・構文化』

本書は、「文法化」「語彙化」「構文化」に代表される言語変化の諸現象について、認知言語学、生成文法、日本語学の各領域で取り上げられてきた実例を紹介するとともに、それらの現象が各領域でどう扱われ、どういった理論が構築されてきたかについて解説するものである。それぞれの理論構築における問題設定・解決方法などの異同、残された課題などを最新の研究成果を通して明らかにする。最新英語学・言語学シリーズの第22巻として刊行された。

「はしがき」に続いて、三部から構成。それぞれ順に、認知言語学、生成文法、日本語学の立場から執筆されている。「第Ⅰ部 認知言語学に基づく文法化・語彙化・構文化の分析(石崎保明)」(「第1章 はじめに」「第2章 理論的枠組み」「第3章 way構文」「第4章 ‘time’-away構文」「第5章 所格交替動詞を含む構文」「第6章 第Ⅰ部のまとめ」)「第Ⅱ部 生成文法の観点から見る文法化・語彙化・構文化(小川芳樹)」(「第7章 生成文法における「構文」」「第8章 比較統語論の進展と含意的普遍性の取り扱い」「第9章 パラメータ統語論に関する潜在的問題」「第10章 生成文法による文法化の研究」「第11章 生成文法による語彙化の研究」「第12章 生成文法による構文化の研究」「第13章 意味変化の一方方向性、統語変化の双方向性と経済性の原理」「第14章 第Ⅱ部のまとめ」)「第Ⅲ部 日本語における丁寧語の歴史(青木博史)」(「第15章 はじめに」「第16章 記述の方針」「第17章 「です」の成立」「第18章 対者敬語の成立」「第19章 「です」の文法化」「第20章 おわりに」)。

末尾に「参考文献」「索引」「著者紹介」を付す。(阿久澤弘陽)

(2020年7月26日発行 開拓社刊 A5判横組み 312頁 3,800円＋税 ISBN 978-4-7589-1422-2)

飛田良文・佐藤武義編集代表，小野正弘編，平林香織・矢島正浩・中里理子・園田博文・鶴橋俊宏・広瀬満希子・神戸和昭・村上雅孝・佐藤貴裕・半田真由美・櫻井豪人・飛田良文・萩原義雄著『シリーズ〈日本語の語彙〉4 近世の語彙——身分階層の時代——』

本書は、現在の研究の最前線を踏まえ、新しい視点・成果を提示するために企画・編集された『シリーズ〈日本語の語彙〉』の一冊として刊行されたものである。近世の語彙の特徴について、散文作品や舞台芸術の台本、韻文、蘭学・洋学・白話資料といった近世日本語による多彩な資料を縦糸、武士・農民・職人・商人という近世独自の身分階層、男女差、知識層といった階層差と外国語との接触を横糸としながら考究した論が収められている。

構成は次のとおり。「序 近世の語彙への誘い(小野正弘)」 「第1部 武士・農民・職人・商人のことば」(「第一章 浮世草子の語彙(平林香織)」 「第二章 浄瑠璃の語彙(矢島正浩)」 「第三章 歌舞伎の語彙(中里理子)」) 「第2部 男性のことばと女性のことば」(「第四章 洒落本の語彙——式亭三馬『傾城買談 客物語』を資料として——(園田博文)」 「第五章 滑稽本の語彙(鶴橋俊宏)」 「第六章 人情本の命令語彙——『春色梅児譽美』——(広瀬満希子)」) 「第3部 近世知識人のことば」(「第七章 俳諧・川柳・狂歌の語彙(神戸和昭)」 「第八章 談義本の語彙——『田舎荘子』の世界——(村上雅孝)」 「第九章 節用集と語彙(佐藤貴裕)」) 「第一〇章 読本の語彙(半田真由美)」) 「第4部 外国語との接触によることば」(「第十一章 蘭学資料の語彙(櫻井豪人)」 「第十二章 英学資料による語彙研究の視点(飛田良文)」 「第十三章 唐話資料の語彙(萩原義雄)」)。巻末に「執筆者紹介」「索引」を付す。(田中佑)

(2020年8月1日発行 朝倉書店刊 A5判縦組み 212頁 3,700円＋税 ISBN 978-4-254-51664-7)

程莉著『「重複」の文法的研究』

本書は、現代日本語と現代中国語の重複表現の観察から、重複と文法の関係性を論じるものである。具体的には、重複表現に文法的要因が関与する度合いと重複表現の容認度の言語差異という二つの問題意識から、さまざまな重複表現の自然さ・不自然さを文法の観点から解明することを目的としている。氏の博士論文「重複の文法的研究」の一部を改訂して刊行された。

構成は次のとおり。「I 序論」(「第1章 はじめに」「第2章 前提」) 「II 異なる構造における重複」(「第3章 「項－述語」構造における重複」「第4章 「主題－題述」構造における重複」「第5章 「修飾－被修飾」構造における重複」「第6章 「並列」構造における重複」「第7章 その他の重複」) 「III 結論」(「第8章 全体のまとめ」)。末尾に「謝辞」「参考資料」「参考文献」「索引」を付す。(阿久澤弘陽)

笹原宏之著『方言漢字』

本書は、姓、地名のような固有名詞における漢字の地域性、そして普通名詞や方言を表記する際の地域色溢れる漢字を取り上げ、そうした実例を観察・解説することで、多様な地域文化を一望することを目指したものである。北海道から沖縄までの漢字を伝統的な漢字学の観点も加えつつ扱うという目的の下、エリアごとに章が分けられている。2013年に刊行された『方言漢字』（角川選書）に筆を加え、文庫化したものである。

構成は次のとおり。「はじめに」「第一章 漢字と風土——漢字の使用地域とそこに暮らす人々——」「第二章 北海道・東北の漢字から」「第三章 関東の漢字から」「第四章 中部の漢字から」「第五章 近畿の漢字から」「第六章 中国・四国の漢字から」「第七章 九州・沖縄の漢字から」「第八章 方言漢字のこれから」。末尾に「あとがき」「文庫版あとがき」「主要文献」を付す。（阿久澤弘陽）

(2020年8月25日発行 KADOKAWA 刊 文庫判縦組み 304頁 960円+税 ISBN 978-4-04-400605-1)

宇佐美まゆみ編、福島佐江子・ガヤ直美・大橋純・大橋裕子・重光由加・ナズキアン富美子・大塚容子・田中リディア・岡本成子・長谷川葉子・南雅彦著『日本語の自然会話分析——BTSJ コーパスから見たコミュニケーションの解明——』

本論文集は、2017年に『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2017年先行リリース版』を限定公開した際に、世界各地で精力的に言語研究を行っている研究者に当該コーパスを用いた分析を依頼し、寄せられた論考をまとめたものである。分析の観点を統一することなく、様々な立場、アプローチの分析を集めることで、『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の持つ意義と可能性を示すことを意図している。

「はじめに」「本書で使用されている BTSJ の記号凡例」「第1章 語用論的分析に適した『BTSJ 日本語自然会話コーパス』構築の趣旨と特徴（宇佐美まゆみ）」に続き、「第1部 日本語自然会話におけるポライトネス」に「第2章 ポライトネスと配慮——受諾と断りを伴う依頼の場合——（福島佐江子）」「第3章 依頼表現の諸相——依頼の明示性の観点から——（ガヤ直美）」「第4章 雑談に表出する依頼と受諾——「です・ます」体の使い分けと、自然会話を素材とする教材への応用の観点から——（大橋純・大橋裕子）」「第5章 質問行為に伴う配慮——初対面会話と親しい者同士の男性の雑談より——（重光由加）」を、「第2部 日本語自然会話における会話のストラテジー」に「第6章 談話における終助詞「よね」——引き込みという観点から——（ナズキアン富美子）」「第7章 自然会話における感動詞「あつ」の機能——日本語教育の観点から——（大塚容子）」「第8章 友人同士の会話におけるディスコース・マーカー——性差の観点から——（田中リディア）」を、「第3部 日本語自然会話におけるスタイルとその発達」に「第9章 大学生の会話と性差——ジェンダー構築の観点から——（岡本成子）」

「第10章 会話の非流暢性 (disfluency) ——会話スタイルの観点から—— (長谷川葉子)」 「第11章 談話のインタラクションと言語発達——比較文化心理学の視点から—— (南雅彦)」を収録。巻末に「索引」「執筆者紹介 (執筆順)」を付す。(田中佑)

(2020年8月31日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 304頁 4,200円+税 ISBN 978-4-87424-835-5)

磯野英治著『言語景観から学ぶ日本語』

本書は、身の回りにある看板や掲示物などに書かれている文字言語(言語景観)を活用しながら日本語を学ぶとともに、言語学的な見方や異文化コミュニケーションが学習できるように編まれたものである。自学自習のためだけでなく、言語景観を教育に利用できる一科目一コースの教材としても利用できる。

構成は次のとおり。「まえがき」「序章 言語景観の勉強を始める皆さんへ——言語景観とは何か——」「レッスン1 言語景観の概論(定義・対象・観点)」「レッスン2 公共表示と民間表示の違い」「レッスン3 音声と表記」「レッスン4 使用文字の多様性とその効果」「レッスン5 使用語彙の多様性とその効果」「レッスン6 ピクトグラム・記号」「レッスン7 正用と誤用」「レッスン8 適切性・自然さ」「レッスン9 役割・多様性」「レッスン10 言語と経済」「レッスン11 方言使用と都市・地方」「レッスン12 外国人集住地域と国際化・多民族化」「レッスン13 電気・サブカルチャーの街を歩く」「レッスン14 社会的背景や使用意図」「レッスン15 語用論的使用」「終章 言語景観研究のこれから」。末尾に「参考文献」「あとがきにかえて」を付す。(阿久澤弘陽)

(2020年9月1日発行 大修館書店刊 A5判横組み 160頁 1,600円+税 ISBN 978-4-469-21381-2)

山口仲美著『山口仲美著作集8 現代語の諸相2 言語の探検・コミュニケーション実話』

山口仲美氏の著作集(全8巻)の一つ。言葉やコミュニケーションに関する内容をエッセイタッチで綴った単行本『山口仲美の言葉の探検』(小学館, 1997年), 『中国の蟬は何と鳴く?——言葉の先生, 北京へ行く——』(日経BP, 2004年), 『大学教授がガンになってわかったこと』(幻冬舎, 2014年)と、著者の身の回りで起きた出来事に関するエッセイ、著者の経歴を収めた最終巻。

「著作集の刊行にあたって」「まえがき」に続き、「I 言葉の探検」に「プロローグ」「一 気になるわ、その言葉!(言葉の探検)」「二 こんな読みもあり?(読み・書きの話)」「三 そんな意味だったの?(意味の変遷・語源)」「四 うまい! その言葉(効果的な言葉遣い)」「五 まずいこと言っちゃった(失敗した言葉遣い)」「六 言葉造りが楽しくて(名づけの話)」「七 昔の言葉はエレガント!? (古典語の話)」「八 垣根をとって話してみたい(若者言葉・熟年言葉)」「エピローグ」を、「II 言葉の先生, 北京に行く——コミュニケーション実話(1)——」に「はじめに」「一 日中の言葉を訪ねて」「二 日常会話の

愉しみ」「三 中国人が日本古典を読めば」「四 駆け引きの国にて」「五 人々の想いにふれる」を、「Ⅲ 大学教授がガンになってわかったこと——コミュニケーション実話(2)——」に「プロローグ」「一 大腸ガンの時」「二 膵臓ガンの時」「三 比較・共通のこと」「エピローグ」を、「Ⅳ 身辺エッセイ&経歴」に「一 身辺エッセイ編」「二 経歴編」を収録。巻末に「既発表論文・著書との関係」「あとがき——著作集の完成にあたって——」を付す。(田中佑)

(2020年9月10日発行 風間書房刊 A5判縦組み 740頁 5,800円+税 ISBN 978-4-7599-2335-5)

斎藤衛・高橋大厚・瀧田健介・高橋真彦・村杉恵子編『日本語研究から生成文法理論へ』

本書は、国立国語研究所領域指定型研究プロジェクト「言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく実証的研究」及び「日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得」の研究成果の一つとして刊行されたものである。現在の生成統語論における研究動向から見て重要度の高い領域の複数のトピックが扱われており、一般言語理論の発展に寄与しうる日本語特有の具体的な現象の分析とその理論的帰結が論じられている。

「はしがき」「はじめに」に続く五部構成。「Part I ラベル付けと言語間変異」(「第1章 弱主要部と言語類型論——日本語の文法的特質をめぐって——(斎藤衛)」「第2章 二重側方移動とラベル付け(高野祐二)」「第3章 二重焦点の格助詞脱落とラベル付けについて(多田浩章)」「第4章 ス克蘭プリングか？QRか？ラベル付けに基づくアプローチ(奥聡)」)「Part II 統語知識の獲得」(「第5章 ラベル付けの相対的普遍性——第一言語獲得からの示唆——(村杉恵子)」「第6章 ECP効果の獲得と間接否定証拠(藤井友比呂)」「第7章 幼児日本語における作用域の反再構築化現象(杉崎鉦司)」)「Part III 名詞句の構造と意味」(「第8章 「-方」名詞節の構造(瀧田健介)」「第9章 日本語裸名詞の意味論(和泉悠)」「第10章 人称代名詞、指示詞と主文現象(林晋太郎)」)「Part IV 省略現象の多様性」(「第11章 一人称空目的語と項省略(高橋大厚)」「第12章 助詞残留現象(坂本祐太・斎藤広明)」「第13章 とりたて詞の分布とその省略への帰結(船越健志)」「第14章 短縮回答——名詞句内分配解釈の可否からの示唆を求めて——(宮本陽一)」)「Part V 格標示と統語構造」(「第15章 主格目的語の移動と作用域(越智正男・猿渡翌加)」「第16章 例外的格標示構文(岸本秀樹)」「第17章 例外的格標示構文の対格主語(高橋真彦)」)。末尾に「索引」「執筆者紹介」を付す。(阿久澤弘陽)

(2020年9月20日発行 開拓社刊 A5判横組み 320頁 4,000円+税 ISBN 978-4-7589-2288-3)

米田達郎著『驚流狂言詞章保教本を起点とした狂言詞章の日本語学的研究』

本書は、従来の研究において口頭語資料ではないとされてきた資料の中に、日本語史における新たな事実や、その展開の過程をうかがうことができるものが存在するという立場の下、1716～1724年にかけて筆写された驚流狂言詞章保教本を中心的な資料に、

18 世紀以降における狂言詞章の様相を考究しようとするものである。

構成は次のとおり。「はじめに」「第一章 対称詞から見た狂言詞章の変遷——鶯傳右衛門派の場合——」「第二章 日本語史資料としての江戸時代中後期狂言詞章——鶯流狂言保教本を起点として——」「第三章 鶯流狂言詞章保教本の対称詞について——オマエを中心に——」「第四章 江戸時代の狂言台本詞章における一人称詞オレについて——保教本を中心に——」「第五章 江戸時代中後期狂言詞章の丁寧表現について——マシテ御座ルを中心に——」「第六章 保教本に使用される（ウ）ズルについて——②古語型として使用される語について——」「第七章 江戸時代中後期狂言詞章に見られる終助詞ワイノについて——鶯流狂言保教本を中心に——」「第八章 江戸時代中後期狂言詞章の終助詞トモについて——鶯流狂言保教本を中心に——」「第九章 江戸時代中後期狂言詞章における終助詞ナアについて——鶯流狂言保教本を中心に——」「第一〇章 鶯流狂言詞章に使用される応答表現「デ御座ル」について——保教本を中心に——」「付録 大蔵流狂言虎明本における（サ）シメから見た要求・依頼表現——保教本における要求・依頼表現との比較を見据えて——」。巻末に「初出一覧」「あとがき」「索引」を付す。（田中佑）

（2020 年 9 月 24 日発行 武蔵野書院刊 A5 判縦組み 308 頁 8,500 円＋税 ISBN 978-4-8386-0733-4）

由本陽子・岸本秀樹編『名詞をめぐる諸問題——語形成・意味・構文——』

本書は、近年注目されている名詞が関与する様々な文法現象を、統語論と意味論の両面から明らかにすることを目的に編まれたものである。2017 年 12 月の英文学会関西支部大会シンポジウム「語彙・構文の文法現象における名詞の役割」と 2018 年 11 月の日本言語学会におけるワークショップ「名詞構文をめぐる諸問題」で発表された 6 本の論文をもとに企画された書である。

構成は次のとおり。「まえがき」「Part I 名詞が関わる語形成の問題」（「動詞連用形＋名詞」複合語の多義について（杉岡洋子）」「名詞転換動詞形成にかかわる制約——英語の作成動詞と産出動詞を中心に——（伊藤たかね）」「日本語の「名詞＋動詞連用形／形容詞」型複合語形成における「形質名詞」の役割（由本陽子）」「Part II 名詞が関わる意味解釈の問題」（「同格名詞句における各名詞句の役割（眞野美穂）」「軽動詞構文における強制と共合成——「する」と「ある」をめぐる——（小野尚之）」「動詞意味論における事象の反復性——動詞と目的語からみて——（志田祥子・中谷健太郎）」「Part III 名詞が関わる統語の問題」（「難易文・可能文における裸名詞句の解釈と統語構造（鈴木彩香・竹沢幸一）」「「X は高い」と「X は高さがある」の比較から見た尺度構文の統語構造（小川芳樹・新国佳祐・和田裕一）」「構文交替への語彙派生アプローチ——項の変換による構文交替——（工藤和也）」「構文に生起する派生名詞と受動化（小栗哲哉）」「周辺的現象から見る英語名詞句の統語論（前川貴史）」「Part IV 諸言語における名詞の問題」（「名詞のクオリアと中国語の場所を表す非典型的的目的語（于一楽）」「ハンガリー語の所有標識（江口清子）」「シンハラ語の名詞修飾節における主語の格標示（岸本秀樹）」）。

末尾に「索引」「執筆者紹介」を付す。(阿久澤弘陽)

(2020 年 10 月 25 日発行 開拓社刊 A5 判横組み 316 頁 4,500 円＋税 ISBN 978-4-7589-2290-6)

井島正博編著，井上優・大島資生・岡崎友子・鴻野知暁・定延利之・沼田善子・野田春美・野田尚史・早津恵美子・前田直子・宮崎和人著『現代語文法概説』

本書は、21 世紀の現代語文法研究の現状をできる限り偏りなく、かつ、議論の深まりを損なうことなく概観することを目的とした概説書である。これまでの文法概説書に多く見られた品詞ごとの章立てではなく、文法機能を中心とした章立てを採用し、各分野を牽引してきた研究者に解説してもらうことで、専門分化が進んだ文法研究の現状をわかりやすく概説している。

構成は次のとおり。「第 1 章 現代語文法概説序論 (井島正博)」「第 2 章 ヴォイス (早津恵美子)」「第 3 章 テンス・アスペクト (井上優)」「第 4 章 モダリティ (宮崎和人)」「第 5 章 「は」と「が」 (野田尚史)」「第 6 章 とりたて詞 (沼田善子)」「第 7 章 指示詞 (岡崎友子)」「第 8 章 条件表現 (前田直子)」「第 9 章 連体 (大島資生)」「第 10 章 否定表現 (井島正博)」「第 11 章 形式名詞述語文 (野田春美)」「第 12 章 語用論 (定延利之)」「第 13 章 パソコン言語学 (コーパス言語学) (鴻野知暁)」。巻頭に「はじめに (井島正博)」「凡例」を、巻末に「索引」を付す。(田中佑)

(2020 年 11 月 1 日発行 朝倉書店刊 A5 判横組み 184 頁 2,900 円＋税 ISBN 978-4-254-51618-0)